≪音楽の思い出≫

≪4歳の舞台出演≫

4歳の時に堺中学校で行われた演芸大会の舞台が初出演でした。

≪学年役員選挙≫

5歳上の兄は、ギターを弾きながらフォークソングを家でよく唄っていました。吉田拓郎、井上陽水、アリスなどのミュージシャンの歌は、兄が聞いていたので、自然と覚えてしまいました。
小学校5年生の時に学年の役員を決める選挙があり、書記に立候補しました。もともと学級委員などをやる事が好きだったので、学校全体の役員に立候補しようと思いました。
立候補者は、体育館で全校生徒の前で、演説をする事になり、「当選する為には？」と思いついたのが、ギターで唄えば目立つと思い、ギター1本を持ち、アリスの「ジョニーの子守唄」を演説の替え歌にして、演奏して唄いました。会場は盛り上がり、見事!!書記に当選しました。

≪たのきんの憧れ≫

小学校6年生の頃、3年B組金八先生を夢中で見ていました。学区が忠生中と堺中のどちらにでも行けましたが、金八先生の学ランに憧れて、堺中学校に決めました。
トシちゃん、マッチ、ヨッちゃんは、私の憧れで、今でも大スターです。

≪ブギウギI love You≫

中2の林間学校の夜のクラスの出し物で、トシちゃんの「ブギウギI love You」を唄い、踊りました。クラスの皆にも助けられ、もの凄い盛り上がりで、なんと1番の「あんたが大賞」を受賞しました。

≪シブガキ隊≫

中3の文化祭で、クラスの森崎と次原とシブガキ隊の「NAINAI16」を体育館で行う事になり、パフォーマンスとして、バク転を行う事になり、日々練習しました。
練習の成果が出て、何とかバク転が出来るようになり、本番も大成功でした。
そのあと、トシちゃんの「君に決定!!」もスケーボーで登場し、大変盛り上がりました。

≪バンドの出逢い≫

中3の15歳の時にリーダーの佐藤裕之が、文化祭でバンドをやるので、ボーカルをやってみないかと誘ってくれ、ボーカルをやる事になりました。
バンド名は「サティスファクション」。そこから私の音楽が始まりました。
佐藤裕之がバンドに誘ってくれなかったら今の音楽人生が無かったかもしれません。佐藤には本当に感謝しています。(佐藤とは、今でも仲が良いです)明けても暮れてもバンドの事を考えて夢中になり、のめり込んでいきました。

≪ハウンドドッグ／浜田省吾／BOOWY／チェッカーズ他のコピーバンド≫

高校生活は、全てバンドに注ぎました。最高に楽しかったです。
「サティスファクション」は高校1年まで活動を行い、コピー曲を中心に行いました。
コピー曲は「ハウンドドッグ」を中心に「大友康平」になりきって唄っていました。
特に16歳の時に聞いた、ハウンドドッグの「BRASH　BOY」のアルバムは夏を感じ、思い出深いです。
また、浜田省吾の「路地裏の少年、明日なき世代、終わりなき疾走」を聞くと夏休みを思い出し、胸が熱くなります。

≪サティスファクションLIVEの足跡≫

1982年10月／日（／）　IN プレハブ LIVE　堺中文化祭　15才
1983年4月2日（土）　堺中卒業 LIVE　町田市農協3Fホール　15才
1984年1月7日（土）　堺市民センター LIVE　15才
1984年8月14日（火）　小山センター LIVE　16才
1984年8月23日（木）　堺市民センター LIVE　17才

≪ザ・グラフィティー 誕生≫

1985年2月3日（日）　堺市民センターLIVE　17才
佐藤裕之、有馬直樹、木下ゆみで、「ザ・グラフィティー」を結成し、本気でプロになりたいと思うようになりました。
バンド名は、映画「アメリカングラフィティ」より命名し、永遠にロックンロールを愛し、映画の彼らのようにいつまでも友情と青春を謳歌したいとの願いを込めて、「ザ・グラフィティー」としました。
結成後は、各ホールでのライブ活動を本格化して、プロになる為に様々なコンテストを受けるようになりました。

≪ザ・グラフィティー LIVEの足跡≫

1985年2月11日（月）　忠生市民センター LIVE　17才
1985年3月18日（月）　東府中商工会議所 LIVE　17才
1985年4月28日（日）　小山センター LIVE　17才　ドラム 木下ゆみ 登場！
1985年5月18日（土）　府中市民会館LIVE　17才　ゲスト：矢吹薫　出演！
府中市民会館LIVEでは、府中市民会館を学生で満席にするという快挙を果たし「グラフィティー最高のステージ」となりました。
ゲストは「矢吹薫」が出場し、さらにLIVEは盛り上がりました。

1985年6月9日(日)　ヤマハEAST WEST 85´ オーディション 85
新宿WISH BONE　17才
LIVE予選(結果)予選落ち！ゲスト 竜童組 ギターリスト
LIVE予選の結果は、予選落ちでしたが、 ベストドラム賞に「木下ゆみ」、ベストエキサイト賞に「内田弘二」と、ダブル受賞しました。
その後も、町田市、八王子市、府中市他でライブ活動を積極的に展開しました。
1985年7月31日(水)　舞踏会　18才　府中グリーン・プラザ
ザ・グラフィティー・初のダンスパーティー！
1985年8月11日(日)　堺市民センター LIVE　18才
1985年9月19日(木)　グレートX ヘアーショー　18才　川崎市民プラザ
1985年12月25日(水)　クリスマス LIVE　18才　府中中央文化センター
1986年2月25日(火)　府中けやきホール LIVE　18才
1986年3月9日(月)　TATE GRADUATION LIVE　18才
‥1年間活動中止！…
1987年5月4日(日)　ザ・グラフィティー 復帰第1弾　LIVE　19才 砧区民会館
オリジナル4曲含む　完全復活！
1987年7月26日(日)　町田ジョルナ・ガーデンホールLIVE　20才
1987年10月10日(土)　町田公民館ホール LIVE　20才

《ザ・グラフィティー　オリジナル　レコーディング》

1988年1月31日(日)　ザ・グラフィティー・オリジナル　レコーディング　20才
堺市民センターホールで、1日という限られた短時間で11曲を録音するという、「一発録り」での「強行レコーディング」が行われました。
レコーディングメンバーは、Bass:佐藤裕之、Vocal:内田弘二、Guitar:有馬直樹
Guitar:桜井敬久、Drums:河内祐。
数日後に完成した「THE　GRAFFITI」(当時は、カセットテープでした)を聞いた時、本当に嬉しかったです。
1988年3月13日(日)　町田文化会館 LIVE　20才
1988年4月24日(日)　町田ジョルナ・ガーデンホール LIVE　20才
1988年5月22日(日)　第1回全日本ロックバンド選手権大会
We are Rock 88　20才
四ツ谷音楽堂(結果)第2次予選通過！
千葉テレビ放出演決定！

《空白の日々》

20歳を過ぎるとメンバーそれぞれの考えや道に分かれ、メンバー全員と音楽の活動が出来なくなってきました。どうしても歌を諦められない気持ちで、空しい毎日を過ごしていました。

≪ザ・グラフィティー 最後の活動≫

1988年6月18日(土)　ROCK INN　CONTEST 88
YAMAHA BAND EXPLOSION 88
神奈川地区予選大会　横浜スクエア ビブレ　20才
このコンテストが、ザ・グラフィティー最後の出場となりました。
1988年8月17日(水)　Do Music Festival　　21才　出場決定!　辞退!!

≪仲間とのプロへの夢≫

今となっては、青春の1ページに最高の形で楽曲が残せた事は良き思い出となりしました。
「バンドでプロ」にはなれませんでしたが、「プロ」になりたいという「夢」や「気持ち」が一瞬でも「メンバーのみんな」と共有出来た事は本当に嬉しく思います。
「ザ・グラフィティーは最高の青春」でした。

≪演歌・ソロとしての活動≫

父親が、歌が好きで近所の皆さんを集めて「沼カラオケ愛好会」というカラオケサークルを立ち上げて楽しんでいました。ジャンルは「演歌」です。
皆さんが「日本人は演歌だよ」と言って、演歌を唄い楽しんでいる姿を見て、
「演歌いいね」と思うようになりました。
一人で唄え、歌唱力が問われる「演歌」で、「演歌歌手になりたい」と思い始めました。

≪NHKのど自慢に挑戦≫

21歳の時に「NHKのど自慢」が町田市に来るとの事を聞き、「何かのきっかけに」なれば良いと思い、迷わずに応募しました。約1,500通のハガキの中からラッキーな事に300名に選ばれました。
1989年2月25日(土) に町田市民ホールで「NHKのど自慢予選」が行われました。
「予選出場者300名」から「25名の本選出場」を勝ち取らなくてはいけないので、かなり厳しいと感じました。
予選では、五木ひろしさんの「港の五番町」を唄いました。
予選会場は、熱気に包まれ、大変盛り上がっていた事を記憶します。
予選者のすべての歌唱が終わり、いよいよ「本選出場者」の発表です。
ドキドキしながら「本選出場者は、内田弘二、港の五番町」と呼んで下さいと願いましたが、結果は、「落選」でした。
がっかりして、家に帰った時、NHKから電話があり、「本選補欠3名に選ばれました」と言われました。「本選補欠3名」とは、本選当日に、「本選出場決定者が病気などで欠席した場合」に、代わりとして出場出来るというものです。
私は、「本選補欠3名」の「2番目」との事でした。
当日の朝に、欠場者が出た場合、NHKから電話があるとの事でしたので、不謹慎ではありま

すが、「誰か2名欠席してくれ!!」と願いながら、電話の前で待っていましたが、残念ながらNHKからの連絡はありませんでした。当日の放送は、「もしかしたら、出ていたかもしれないのに」との思いで、本選出場者の皆さんを羨ましい気持ちでテレビを見ました。
次回も必ず挑戦するぞ!!の気持ちがますます沸いていきました。

まだまだ続く…